

多摩OL、7度目の優勝を飾る

2007年9月17日 クラブカップリレー (長野県駒ヶ根高原)

多摩OL 監督・7走
円井基史

思い出せる印象的な場面はいくつかある。多摩OLの7走アンカーとして、優勝のゴールを切るまでの軌跡、心境を少し紹介したい。

(多摩OL 監督・7走 円井基史)

楽しい修羅場がやってきた

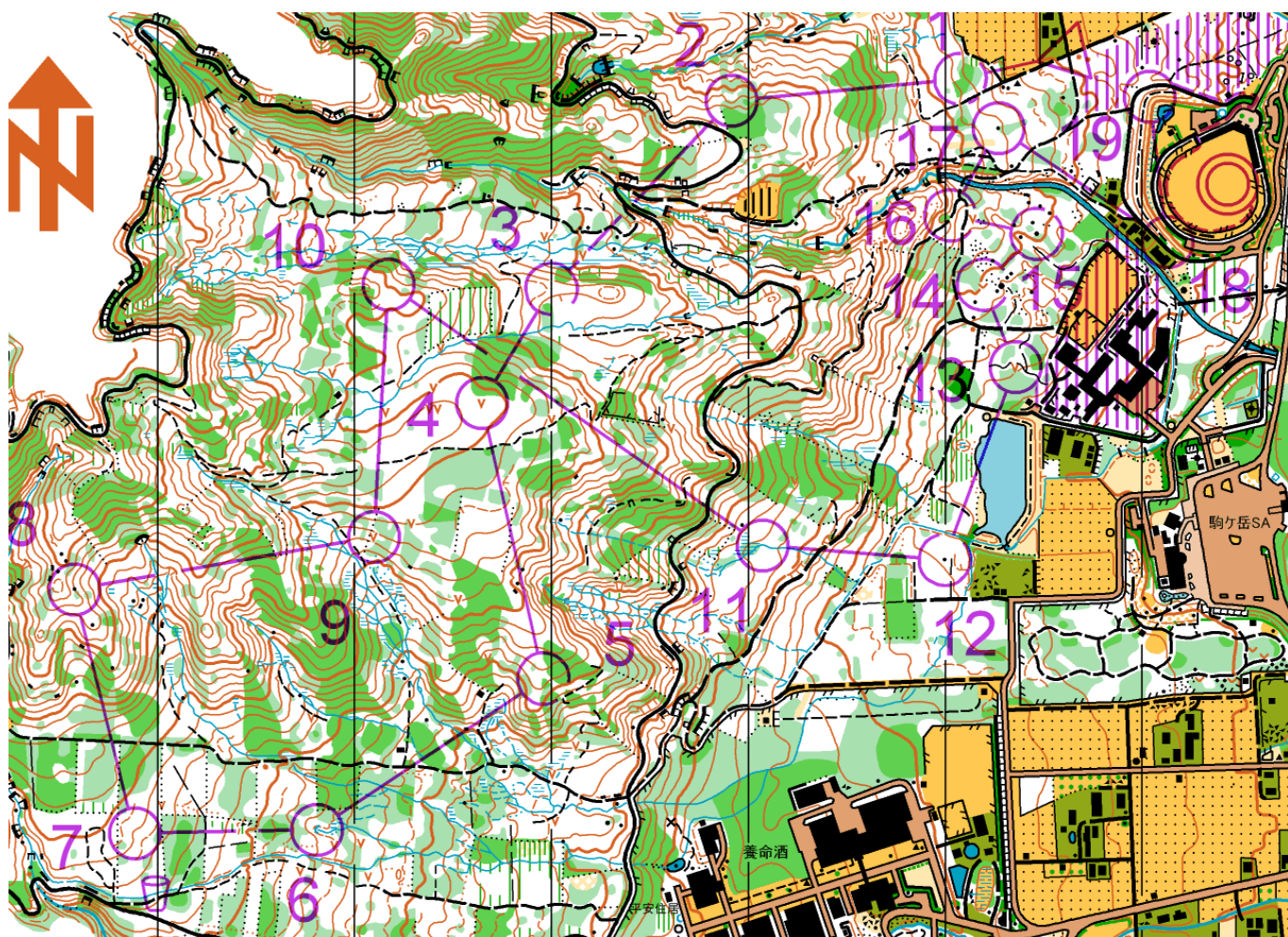
1走で出遅れ、2走でも思ったような巻き返しが図れず、正直厳しいと思った。何より、ES関東Cのメンバーを聞いたとき、それは勝ち目のない強烈な布陣だと思った。だが漠然と優勝は諦めていなかった。特に優勝への道筋が見えていたわけではない。このときはただ根拠もなく優勝への道はまだ残っていると感じた。

3走で驚異的な追い上げを見せ、4走でトップに立ち、5走でも食い下がり、6走はほぼトップに近い場所でタッチを受けて走り出した。6走-7走、各チームのエース級2選手が登場する大一番へ場面は突入していった。不思議と緊張はしていなかった。おそらくこれまで7走アンカーでの修羅場を数回経験したことによるだろう。こんな優勝争いの中、アンカーを走らせてもらえることはとても幸せで、貴重な体験で、そして何より楽しいと思った。思いのほかりラックスしていたように思う。

ただ、まだ優勝への道筋を見出していたわけではなかった。客観的に6、7走の実力を分析して、我々が多摩OLは決して強くなかった。特に、すぐ後ろに迫っているES関東Cとときわ走林会と比べると見劣りすることは確かで、

彼らと勝負して優勝のゴールテープを切るイメージを持つことは難しかった。やはり優勝に対しての不安があり、あるいは重圧があり、どこかでナーバスになっていたのかもしれない。

真っ先にビジブルコントロール(ラス前コントロール)に飛び込んで来たのはES関東Cの6走山口選手だった。次に控えるES関東Cの最終走者は、今年の世界選手権リレーでアンカーを務めた加藤選手。ここ最近、個人レースで彼に勝てたことはほとんどない。ES関東Cに遅れること20秒後、多摩OLの6走多田がビジブルコントロールを通過。いよいよタッチゾーンに入る。数チームが団子状態のようだ。各チームのアンカーがタッチゾーンに揃いだす。ときわ走林会アンカーの高橋雄哉選手もタッチゾーンに姿を見せる。昨



クラブカップ・エース区間である7走のコース。中央自動車道「駒ヶ岳サービスエリア」近くにある「アルプス球場」を会場に、中央アルプスの麓を走るコース設定。緩急ある斜面、微地形地帯、激しく変化する植相。走行性が高い割には視界の利かない森。ナビゲーションと走力を試す要素がたっぷりと盛り込まれたコース設定だ。テレイン南には養命酒工場がある。

年のアンカー勝負で走り負けた選手である。加藤選手と高橋選手は昨年のクラブカップアンカー勝負の2位争いでともに森の中で競り合っており、戦い再びという感じであった。

見えた！勝利への道すじ

ES 関東 C の山口選手はビジブルコントロールからの長い道走りで後続との差を広げ、タッチを受けた加藤選手がスタートしていく。ここで、ふと、ふいに、考えが浮かんだ。「普通に一人マイペースでやっても加藤選手には勝てない（追いつけない）。7走は同一コースだろう（注：実際は同一ではなかった）。だとしたら、早めに捕まえて、バックを利用するのが良いのでは。バックで会場になだれ込み、最後のスプリント勝負なら、誰にも負ける気がしない。つまり先頭に追いついた時点でオレの勝ちだ。勝負は1番まで、あるいは2番までだ」。この瞬間、さーっと霧が晴れるかのように、気持ちが軽くなった。走り方が決まった。難解なパズルがふとした発想で解け、優勝への道筋がはっきり見えた瞬間であった。自身の走力に対して、こういった自信を持てるようになったことは意外で、また同時に頼もしく思えた。加藤選手がスタートしてから50秒後に、僕はタッチを受けて、スタートを切った。

優勝への糸をたぐり寄せる

スタートまでの長い道走りで先読みしてプランニングを終えるという戦略もあっただろう。しかしここは走りに走った。OLP 兵庫アンカーの片山選手を一気に抜き去った（ここで京葉 OL クラブの寺垣内選手も抜いたものと思われる）。600m の緩やかな登りの道走り、スタートフラッグに着く頃には、加藤選手の背中もだいぶ大きくなった。1番へのプランを立てる。森に入る。1番を取る。加藤選手の姿を探すもない（注：実際はパターンが異なり、1番コ

ントロールの位置が違っていた）。次のチャンスは2番までの登りだ。右と左でルートチョイスに悩む。5秒ほど考えて、左を選択。息を上げて登る。途中で果てても良い。優勝へ繋がる細い糸は今ここにある。

2番へのアタック。コントロールに向けてコンタリングしているとき、ついに加藤選手を捕らえる。まさにシナリオ通り。優勝へ向けた完璧なレース展開であった。加藤選手は自分より下方に居るため、自分が先行していることが分かる。ここでペースダウンをして日本屈指のナビゲーションスピードを持つ加藤選手を利用する手もあったが、一人でアタックを続ける。パンチして脱出。上の道への脱出途中でなぜか加藤選手に出会う。ルートの同じコントロールを通過してきたとは考えられない。おそらくミスしたのだらうと判断し、一人先を進む。この時点で自分がトップであることを認識する。これで逃げる展開となった。

逃げる展開の戦略

ここで走り方を変えた。大切なのは、後続に追いつかれても良いからミスしないこと。正しいルートをチョイスすること。怖いのは、一人で間違った場所をさまよひ、知らないうちに抜かれること。タイムが速い必要は無い。トップ集団で会場に戻ることが最重要任務であることを肝に銘じる。

ここからは追われる立場での、我慢のひとりナビゲーション。ミスをしないように慎重に。アタックし、方向を変えて脱出して横を振り返ると、かすかに人影が見え隠れする。一人なのか複数なのか、ウェアも顔も認識できない。正しいルートを維持しながら容易には追いつかせない。見えない後続の影が背後から迫ってくる中、彼らが通るであろうルートを選択し続ける。

コースも後半に差し掛かった頃、ふいに背後に選手が現われた。ついに加藤選手の登場か、と思うも、それは意外にも京葉 OL クラブの寺垣内選手であった。軽い走りで斜面を登っていく。軽快な走りに感心する。トップを譲る。しばらくは併走するでしょう。無理して追い抜く必要はない。その次のレッグでルートを分け、先行する形となった。

またも一人旅。会場直前のコントロールピックアップエリアに入る。僕の苦手な技術的コースであることを認識する。まだトップにいることは確信している。僕がやることは後続に追いつかれても良いからミスしないこと。「歩いても良い」と自分に強く言い聞かせる。会場は近い。優勝も近い。

クライマックスへ

ラス前のビジブルコントロールの1つ前のコントロールで、加藤選手が現われる。ついに登場、そのドラマのような展開に笑み。ほぼ同時にパンチ。脱出は例によって彼が速いので、しばらく追走する。地図を見て、もう次はビジブルコントロールで、走るだけの区間であることが分かった。もはや地図を見る必要はない。コントロール番号もチェックしない。

加藤選手を追走しながら、どこでスパートをかけるか考える。一番確実なのは、ゴール手前100m程度でのスパートだろうと思った。だが、下りのスピードが違った。ラス前のビジブルコントロールは僕が先行してパンチすることになった。多摩 OL のみんな、1位でゴールするよ、待ってろ。

まだ先は長い、少し手を抜いて走る。ラストコントロールをパンチ。後ろは5mか10mか、気配を読み取る。会場への下りの舗装路を加速する。コーナリング。まだバテるな、まだバテるな。野球場に入る。残り300m程度か。チームメイトが併走してくれる。「死ぬ気で走れ」と檄が飛ぶ。もはや後ろの気配を感じる余裕がなくなってきた。どうだ、抜かれるのか、逃げ切れるのか、誰か教えてくれ。

そして、多摩 OL、3年ぶり、7回目の優勝のゴールへ。

最後になりましたが、運営者の皆さん、参加者の皆さん、楽しい舞台を、本当にありがとうございました。ぜひ来年もよろしく願います。

（多摩 OL クラブカップ監督 兼 A チーム 7 走 円井基史）



アンカー勝負となったクラブカップ。観客の大歓声を浴びて最終コントロールでも競い合う。多摩 OL の円井（右）が ES 関東 C の加藤（左）を僅かにリード。そのまま優勝を決める。